

保護者向けガイドブック
親子で語ろう！テレビの見方

企画・制作 TBSビジョン

目次

	ページ
●この教材の利用の仕方について	1
ステップ1: 「比較して見る」	
ステップ2: 「テレビの特徴をとらえる」	2
ステップ3: 「だれにむけたメッセージかを考える」	
ステップ4: 「報道」や「ジャーナリズム」について考える	3
ステップ5: 「お気に入りのニュース番組は何？」 ――テレビが話題を誘導する？――	4
ステップ6: 「家族で話し合う、友だちと意見交換する」	
ステップ7: 「実際の放送を比較してみる」	
●保護者のみなさまへ	5
「テレビと幼児」	
「家庭で育てるテレビを見る目」	
「メディア・リテラシーとは」	
「家族で始めるメディア・リテラシー」	6
●メディアとのつきあい方	7

この教材の利用の仕方について

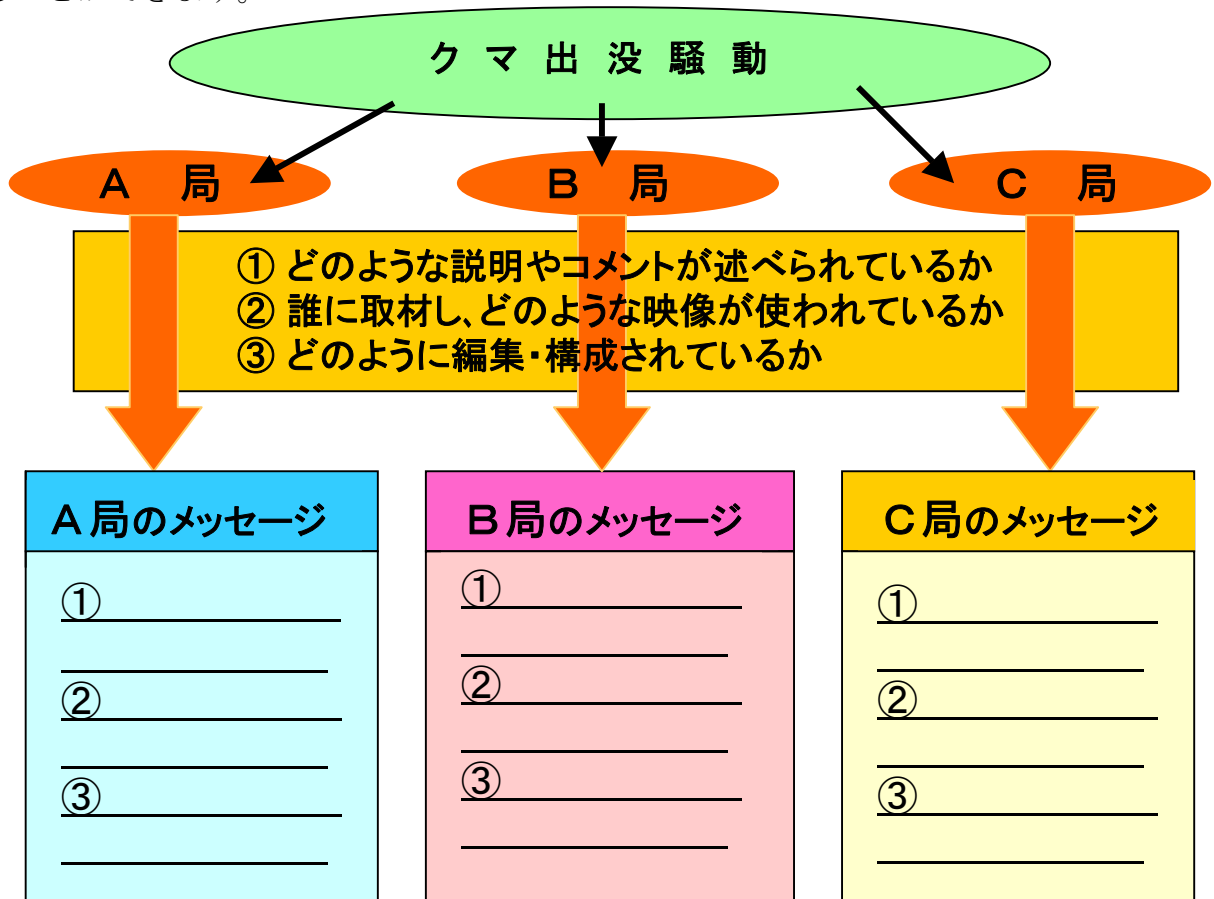
このビデオ教材は、保護者の方がご家庭で子どもたちとテレビを見るときに活用していただくために制作されたものです。ご家族でこの教材をお子さんと一緒に視聴していただきながら、テレビの見方を考えるきっかけにいただければと願っています。

ここでは、3つのテレビ局のニュースを素材として扱っています。同じ「クマ出没」のニュースが、どのように報道されるかによって、伝わるメッセージが変化すること気づいていただけるような構成となっています。

ステップごとに、お子さんと話し合いながら、一緒にお考え下さい。

●ステップ1：比較して見る

まず、Aテレビ、Bテレビ、Cテレビのニュースを比較して見ましょう。それぞれのニュースで「同じ点」と「違う点」を、お子さんと一緒に話し合ってみてください。各テレビ局のニュース番組が、どのようなメッセージを伝えようとしているかを知ることができます。



各テレビ局のニュースについて、①どのような説明やコメントが述べられているか、②誰に取材し、どのような映像を使っているか、③どのように編集・構成されているか、を比較すると、それぞれのテレビ局のニュースのメッセージが実際にどのように違うかがわかります。お子さんと一緒に各テレビ局のメッセージの違いを上メッセージの欄に書き出してみてください。

●ステップ2：特徴をとらえる

各局のニュースは、同じように山奥県奥山村からレポーターが伝えていますが、各局のニュースの特徴をまとめると、次の表のような点があげられるかと思えます。

	Aテレビ ニュースの林	Bテレビ ハイパーニュース	Cテレビ ニュースプラス
①どのような説明やコメントが述べられているか？	1.被害状況の図 2.「山奥県の村では、クマが収穫前の農作物を食べつくし、その被害総額は、数百万円に及んでいます」	「エサを求めて民家にやってきたクマたち。異常気象は意外な騒動を引き起こしているようです。」	1.「クマの生々しい足跡」 2.「クマの目撃情報は、全国で2000件以上」 3.「クマに襲われた死傷者の数は、前年の1.5倍」 4.「人的被害の可能性」
②誰に取材し、どのような映像が使われているか？	1.クマの被害に遭ったブドウ農家の人。 2.字幕「1年で100万円の被害」	1.複数の村の人に取材 2.クマの生態に詳しい林虎之介さん。「異常気象が原因なのではないか」と語る 3.クマの写真	1.クマに畑を荒らされたブドウ農家の人。 2.字幕「ツキノワグマの足跡」 3.字幕「日本各地でクマ出没!!」。 4.クマの写真
③どのように編集・構成されているか？	クマによる被害総額や被害に遭った農家の被害金額について詳しく述べている	クマが民家に現れたのは、台風が多かった今年の異常気象が原因と報告	全国的なクマ駆除の動きと、動物愛護団体からの抗議の声

●ステップ3：だれに向けたメッセージかを考える

さて次に、これら3つのニュース番組がどのような人を対象につくられているかを考えてみましょう。テレビ番組は、放送される時間帯によって対象者が異なっています。朝の時間帯には忙しい会社員や主婦向けに手短かにニュースが紹介されますし、昼間のワイドショーなどの中では、同じニュースでも、視聴者の興味を引くような手法を取り入れて制作されるのが一般的です。

こうした点を考えながら、Aテレビ、Bテレビ、Cテレビのそれぞれのニュースは、どの時間帯の、どんな視聴者を想定しているのか、ご家族で話し合ってみましょう。

それぞれの効果音や、字幕テロップに注目・・・これがヒントです。

Aテレビ
経済的被害

ニュースの林

想定しているのは、家族で見られる夕方（17時～18時台）のニュース。「熊が現れ、畑などを荒した」という事実をストレートに伝えていきます。具体的な被害金額を提示することで、見ている人が「もし、自分の立場なら・・・」と想像しやすい展開になっています。

- ・制作者は、BGM（音楽効果）に、被害の深刻さを伝えられるように「暗いトーン」の曲を使用しています。

Bテレビ
環境問題

ハイパーニュース

- ・想定しているのは、落ち着いた夜の時間（22時～23時台）に放送される大人のニュース。クマが続々と民家に現れた原因を、専門家のインタビューを交えてわかりやすく紹介し、結果的には異常気象に原因があるのではないかと分析しています。

- ・クマ出没騒動の背景を読み解き、知的好奇心をくすぐる展開となっています。
- ・制作者はニュース内容の伝達に主眼を置いているため、BGM（効果音）は極力排除しています。冒頭部分以外はすべてクマ出没現場の音なので、視聴者はこのニュースをより現実のこととして受け止めることができます。

Cテレビ
動物駆除の問題

ニュースプラス

- ・想定しているのは、ワイドショー（15時台）のニュース。
- ・日本各地で起きたクマ騒動をショッキングに伝えた後で、クマが全国的には駆除（射殺）されている事実を報道しています。最後には、駆除に疑問を持つ人たちがいることにもふれて、クマ駆除にまつわる問題を視聴者に問いかけています。

- ・制作者はBGMにクマの狂暴性を煽るようなインパクトのある曲を選んでいきます。このように強烈な曲をつけることで、視聴者をぐいぐい映像に引き込むことがねらいです。効果音が隙間なく入っているのを見て人は、より不安な気持ち（＝クマは怖い）になるでしょう。

●ステップ4：「報道」や「ジャーナリズム」について考える

これまで、Aテレビ、Bテレビ、Cテレビのニュースを例に、具体的な報道の違いをみてきましたが、次は報道やジャーナリズム全般の特徴について、考えてみたいと思います。

ニュースなどを報道しているテレビ局や新聞社、ラジオ局、雑誌社、インターネットニュース配信社は、一社ではなく複数の会社で競い合い、報じています。したがって報道各社の担当者は、できるだけ沢山の人の興味を引くように、それぞれの社の特徴を打ち出した内容にしようと努力します。これは、報道各社が、それぞれ競争関係にある他社との差別化を図りながら、他社より一人でも多くの視聴者や読者を獲得しようとするためです。また同じテレビ局の中でも、制作者は番組ごとに特徴を出して、視聴者によりメッセージ性の強い（印象に残る）情報を提供しようと競い合います。各社が競合することによって、私たちはニュースの多様な側面を、より広く、より深く知ることができます。しかしその一方で、こうしたニュース報道姿勢の背景には、一人でも多くの視聴者や読者を獲得しようとするジャーナリズムの特徴があることを理解しておく必要があります。

●ステップ5：お気に入りのニュース番組は何？

ここまでは、テレビ番組の制作者側の状況に注目してきましたが、ここからはそれぞれのご家庭でのテレビ視聴について考えてみましょう。

皆さんのご家庭では、どのような番組をご覧になっていますか？お子さんの年齢や、ご家族の好みによって視聴する番組は異なっていることでしょう。

この教材でも、ユウキくん、ヒカルくん、アヤミちゃんの家では、それぞれが違った番組を視聴しています。では、ニュース番組を見た後にどのように話が展開されているかをみていきましょう。

テレビ視聴

ユウキくんの家

実家で商店（八百屋）を営んでいるユウキくんの家族は、クマが農家に及ぼした金銭的な被害に関心を持ったようです。「もし、うちの店にもクマが現れて損害をこうむったら…」「もし、台所にクマが現れて冷蔵庫を荒らしていったら…」

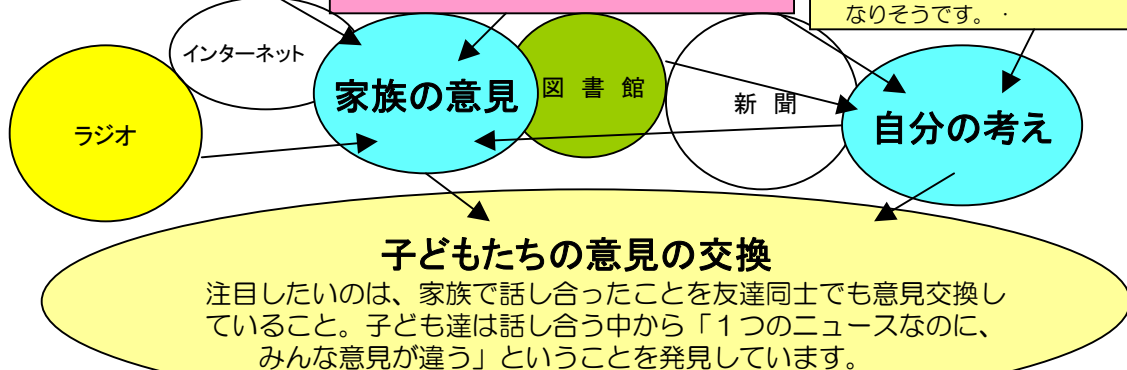
家族全員がクマを迷惑な存在であると考えているため、「（クマと）友だちになれればいいのに…」というユウキくんの素朴な意見もかき消されてしまっているようです。

ヒカルくんの家

日頃から新聞などを読み、情報収集を欠かさないヒカルくんのお父さん。クマ出没の原因（異常気象）に注目して「環境問題を考える必要がある」と話を展開させています。「なんでクマが山から下りてくるの？」というヒカルくんの質問にも、「最近では、クマが人間を怖がらなくなった」など、ニュースで伝えている以外の新たな情報を会話に追加しているのも特徴です。1つのニュースから親子の会話がスムーズに展開していく模範的な例と言えますが、ヒカルくんがどう感じたのか、子供の意見をさらに深く聞く必要があるかもしれません。

アヤミちゃんの家

ペットを飼っているアヤミちゃんの家では、クマが次々と捕獲・駆除されていることに問題意識を持っています。次々とクマを捕まえることが可愛そうだというお母さん。民家に被害を及ぼしたクマは悪者だから捕獲して当然というお兄ちゃん。家族で様々な意見を持つことで、親子の会話が展開しています。「捕獲されるクマが可愛そうだ」という意見を持っていたアヤミちゃんが、この後、友だちとの会話を通じて、被害にあった農家のことを考え、クマ騒動の話題に新たな意見を持ち始めることになりそうです。



テレビが話題を誘導する？

本教材の「ユウキくんの家庭」「ヒカルくんの家庭」「アヤミちゃんの家庭」のように、各ご家庭が好きな番組を見ている場合、それぞれが「自分でテレビ番組を選んでいる」という事ができる一方で、「テレビが意図した方向に意識を引っぱられた」あるいは「誘導された」という側面が生じていることも事実です。いつも同じテレビ局の同じ番組を視聴していると、どうしても一方の見方に偏りがちになります。それを予防するためには、様々な情報源から情報を得る、周りの人と意見を交換する、ということが大切になります。



●ステップ6：家族で話し合う、友だちと意見交換する

前ページの図の下方、丸が沢山並んでいる部分をご覧ください。テレビを視聴して家族で話し合ったことを、子どもたちが「友だちとも意見交換する」様子を図示しました。子どもたちは、それによって、同じニュースでも、人によって見方や意見が違うことを発見し、さらにその後、それぞれが違う意見を持っていたことを、家族にも話しています。

このように、テレビで見た番組について、家族や友だちと話し合い、様々な意見に耳を傾けるということは、複数の見方や考え方があることを知るためにとっても大切なことなのです。

子どもはご家族や友達と話をすることによって、自分とは違った人の立場・意見・視点に気づき、自分以外の人の方考え方や心情、そして状況が理解できるようになります。コミュニケーション能力というのは、一方的に話すだけでは成り立ちません。キャッチボールのように、相手の気持ちを理解しながらでないと会話は続かないからです。一つのニュースがさまざまに受け止められていること、そして皆が違う意見や考え方を持っていることに気づかせるためにも、まずはご家庭で「会話」から始めてみて下さい。

●ステップ7：実際の放送を比較してみる

最後のステップは、実際のニュースを見て比較する「チャレンジ編」です。インターネット上で「動画ニュース」を検索すると、実際に放送された各局のニュースをニュース原稿とともに動画で見ることができます。これらをステップ1～5で学んだ方法を使って、お子さんと一緒にテレビ番組の「分析」を行ってみてください。比較しながら見ると、実にさまざまなものが見えてきます。

ご家族でこうした実践を続けていただくと、子ども達自身の「テレビを見る目」が育つと同時に、ご家族の皆さんの「テレビを見る目」も養われます。

勿論、ご家族で実践する際には、新聞やラジオ、インターネットや、図書館で調べる、といったことも、是非、お子さんと一緒にチャレンジしてみてください。ニュースについて調べる、というのは大人にとっても意外に知らない事実が明らかになって、面白いものです。最初はテレビのニュースを比較することから始めて、新聞の記事と比較したり、あるいはインターネットや図書館で調べた結果を家族で紹介しあったりと、さまざまに楽しみます。

さあ、これで「親子で語ろう！テレビの見方」のガイドは終わりです。
これからも、お子さんと一緒に、ご家族でテレビをお楽しみ下さい。



●テレビと幼児

子どもたちはいつ頃からテレビを見るようになるのでしょうか？これまでの調査研究によると、乳幼児は3～4ヶ月になるとテレビの方を見たり、画面をじっと見つめるようになり、6ヶ月頃には画面を見て声を出したり微笑んだりするとされています。

そして、12ヶ月～18ヶ月頃になると、テレビの体操や歌を真似るようになって、視聴内容への嗜好が見られるようになり、3歳前には一人前の視聴者になると報告されています。またビデオはテレビより早い2～3歳で操作が可能になるということです。子どもたちは大人が考えているより早い段階で、テレビの視聴者になることがわかります。しかしその一方で、小さな子どもたちは、どの部分がコマercialでどこからが番組かもわからないままテレビを見ていることも報告されています。

●家庭で育てるテレビを「見る目」

子どもたちが最も長くテレビを見る場は、家庭です。子どもたちのテレビを「見る目」は、自然に育つわけではありません。保護者のサポートが欠かせません。子どもたちはごく小さな時期からテレビに興味を持ちますので、テレビをベビーシッター代わりに長時間つけっぱなしにするのではなく、時間や番組を決めて見たり、自分でスイッチを切ることをさせるなど、テレビ番組を利用して規則正しい生活のリズムを習慣づけるよう心がけることも必要になります。そうすることで、ご家族でお子さんのテレビを「見る目」を育てていただければ幸いです。

●メディア・リテラシーとは

本教材は「メディア・リテラシー教材」として制作されています。そこで「メディア・リテラシー」とは何か、について少しご説明します。

皆様もご存知のように、現代社会はテレビをはじめとしたメディアの影響を大きく受けています。そこで、メディアからのニュースや情報を一方的に受け取るのではなく、皆でメディアについて勉強し、考えてみよう、というのがメディア・リテラシーの動きです。

総務省では1999年から「放送分野における青少年とメディア・リテラシーに関する調査研究会」を開き、この調査研究会の提言を受けて、メディア・リテラシーを以下のよう

- 1) メディアを主体的に読み解く能力
- 2) メディアにアクセスし、活用する能力
- 3) メディアを通じコミュニケーションする能力
特に、情報の読み手との相互作用（インタラクティブ）コミュニケーション能力

●家庭で始めるメディア・リテラシー

ご存知の方も多いと思いますが、すでに小中学校の総合学習の一環として、メディア・リテラシーの授業に取り組んでいる学校があります。メディア・リテラシーを扱っている小中学校の教科書も一部にあります。また、すでに高校では、2003年から情報の授業が始まり、高校の情報の教科書でメディア・リテラシーを扱っているものも見られます。一般の書店にも、メディア・リテラシー関連の書籍が少しずつ増えてい

ます。メディアの発達した現代社会に生きる私たちは、自身の体験から学んだことよりも、様々なメディアから知り得た情報によって物事を判断している場合が多くあります。

W・リップマンは、

「人々は生活世界の拡大にともない、自分の環境のイメージを、マスメディアなどを介して形成していく。

しかし、マスメディアが示すわれわれの環境像は、現実世界の正確な反映とは限らず、部分的な強調や省略などがなされた擬似環境といえる」

と、紹介しています。

マスメディアが伝える「部分的に強調」されたり、「簡略化」した情報に頼る生活は大変に不安定なものです。

そこで、一つのメディアが伝える情報に依存するのではなく、さまざまな側面からとらえた複数の情報を得て、多面的な現実像に近づける努力が必要になります。

複数の情報を得てから判断するという行為は、実は、私たちは日々の生活の中で実践しています。例えば、重要な情報であればある程、一人の意見だけを聞いてそれを全面的に信じるのではなく、できるだけ多くの人から情報収集し、色々調べた上で判断するといったことは、誰もが日常的に実践していることでしょう。

メディアからの情報も同じことです。さまざまな視点から捉えた複数の情報を統合しながら状況把握することは、現代生活に不可欠な知恵なのです。

子ども達は、学校で、あるいはさまざまな活動の中でメディア・リテラシーを学ぶ機会が少しずつ増えていきます。もうしばらくすると、子ども達はわかっているのに、親である保護者の側のメディア・リテラシーが一番足りない、という時代が来るのかもしれない。

是非、この教材を活用して、お父さん、お母さんもお子さんと一緒にテレビの見方を学んでいただきたいと思います。



駿河台大学文化情報学部
塚本美恵子

イラスト
甲斐美保子

メディアとのつきあい方

上智大学テレビセンター

藤田 高弘

テレビは現代社会を生きる私たちにとって、最も重要な情報源のひとつであることに異論を唱える人はいないでしょう。様々な調査で明らかなのは、現代の日本人は1日平均3時間程度を、テレビを見て生活しています。言い換えれば、1日のうち8分の1を私たちはテレビを見ており、これは睡眠時間や仕事時間に次ぐ、大きな時間をテレビのために費やしているということになります。

これだけ多くの時間をテレビと向かい合っていると、テレビから得る様々なメッセージや情報が私たちの生活に大きな影響を与えることは、簡単に推測がつくことでしょう。ここで言う「影響を受ける」とは、なにも私たちがテレビの伝えるメッセージや情報を、ロボットのように鵜呑みにして、行動したり態度を決めたりしているということではありません。たとえばアクションや暴力シーンの多い番組を見たとしても、見た人たち全員が、そろって暴力的な態度や行動を取るようになってしまうと考えるのは、やや非現実的ともいえるかもしれません。では、テレビの影響とはいったどんなものでしょう。

それがニュースであれ、娯楽番組であれ、テレビ番組は受け手に対するメッセージを持っています。そして、番組は多くの人たちの手によって作られていきます。当然、その人たち、つまり送り手たちは、受け手にどのようなメッセージを流そうとするのか、それがはっきり決まらなると、テレビ局の中で番組制作の企画は了承されません。また、実際のテレビ番組は、限られた「放送時間」という枠、「経費や人手」といった制約の中で作られます。このような制作の過程で、テレビ番組のメッセージは、いろいろなものを捨て去って単純化されていきます。単純化しないと、受け手にとって意味のわからない番組になってしまうからです。

実際に現実で起きる出来事は複雑な背景を持っています。この中から、テレビ番組はいくつかの視点を選んで単純化を行っていきます。

本教材には、クマの出没について報道する3つのニュースが登場します。ご覧になると解ると思いますが、「クマが出没した」というひとつの出来事に対して、それぞれのニュースは、同じ出来事、さらに同じインタビュー相手のコメントを使いながら、異なった見方・立場から番組を構成しており、強調するポイントも異なっています。一見これらすべてが同じ出来事に対するニュースなのかと思う人もいるかもしれません。これらのニュースは、どれが一番正しいのかということではなくて、現実にあるひとつの出来事が様々な面をもっていることを示唆しています。

本教材は、また受け手の価値観や立場によっても、番組やニュースから受け取られるメッセージが異なることを示唆しています。古代の王様は、気に入らない知らせをもたらした使者の首をはねたといいますが、人間は、自分にとって響きのよい情報や価値観を受け入れたがるものだというすることも忘れてはなりません。本教材でも、各家庭の背景によって、「響きのよい」ニュースが受け入れられていることに注目してください。

実は本教材で最も重要なことは、各家庭でそれぞれの「クマ出現」のニュースを見た子供たちが、翌日、意見を交換し、異なった見方を理解して、それぞれの家庭に戻っていくというプロセスです。あっさり描かれています、これが議論の理想的なあり方です。日本人は昔から議論が苦手だと言われています。議論が言い合い、果てはケンカになってしまう。では議論のメリットは、一体なにかというと、他人の立場からものを見ることができるようになるという点につきま。古代ギリシャのソクラテスが開いた学校は「弁証」、すなわち議論によって、倫理的にも論理的にも人間性を向上させるというものでした。他人の見方、すなわち今までの自分とは違う立場から、出来事やものを見ることは思考力の基本的な育成であり、他人の立場を思いやれるという人間性の向上にもつながるのです。そして本来、テレビをはじめとするマスメディアはこのような議論のために貢献をするために、存在するともいえるのです。

このように考えるとテレビの影響が、受け手である私たちにとって最も大きいのは、ものの見方や考え方、どういうものに価値があるのかといった、いわば「前提」の部分にあるかもしれません。テレビが取り上げたから人々にとって注目の的になり、議論の主題になるという「議題設定機能」は、テレビに限らずマスメディアの大きな機能として1970年代以降考えられてきました。いわばメディアに価値のあることを決められてしまうわけです。

また、本教材では3つのニュースはそれぞれ異なった立場を強調した構成になっていましたが、これがもしクマが人を傷つけていたらどうだったでしょうか。3つのニュースとも、クマが怖いといった論調の、同じような報道になった可能もあります。それでも、本教材に取り上げられているいろいろな問題がなくなったわけではありません。

さらに、クマとわれわれの問題は、ここで取り上げられた3つの立場がすべてというわけではありません。たとえば地球環境問題のひとつとしてクマの出現を取り上げることでもできるかもしれません。

繰り返しますが、テレビ番組は様々な制約のなかで作られています。すべての立場から出来事を語ることは不可能です。まして、事故や事件などの衝撃的な出来事が起きれば、その立場は同じになってしまう可能性が高いのです。また、その出来事に隠れて伝えられないほかの重要な出来事も毎日起きています。

そこで私たちは、テレビや新聞などのマスメディアだけではなく、読書によって、あるいはインターネットのサイトや掲示板などの、構造の異なるメディアに接して、日頃から情報を得るようにしていくことが重要になってきます。テレビの持つ制約に縛られない考え方やものの見方が、時として期待できるからです。そうすることで、テレビ番組によって語られなかった立場や見方に考えをめぐらすことができ、よりよいテレビの付き合い方ができるようになっていくでしょう。

平成16年度 総務省メディア・リテラシー教材
親子で語ろう！テレビの見方

2005年3月

監修： 駿河台大学教授 塚本 美恵子

企画・制作：TBSビジョン

Copyright©2005 総務省 (Ministry of Internal Affairs and Communications All Rights Reserved.)

本教材の全部または一部を無断で複写（コピー）することは、著作権法上の例外との除き、禁じられています。